このみや君は頭がおかしい

匣 都香子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

このみや君は頭がおかしい

【Nコード】

N9701X

【作者名】

匣 都香子

【あらすじ】

成績優秀で眉目秀麗、王子様のようなイケメン・好屋君には彼女がいない。ファンクラブなるものはあっても彼に告白する猛者はいない。それは中学時代のある噂が原因だけど、真実は本人しか知らない。そんな好屋君に罰ゲームで告白することになった山田の不幸。どんな理由があろうと他人のケータイを勝手に壊すのはよろしくないです。

私の苗字は山田。至って普通の何処にでもある苗字です。

そして私も、髪も染めなければピアスもしない、制服も校則に沿って着こなすごく普通の女子高生（地味）だ。本当に地味だ。もう特徴がないことが特徴です、としか言い様がないくらい、これといった特徴がない。この間なんか中学からずっと同じクラスだった子に誰って言われた。記憶に残らないタイプの地味女だ。

背後に立ってても気づかない、遅れて教室に入っても誰も気づかない（先生ですら）、廊下のだ真ん中に立っていても気づかれない。そんな私につけられた渾名が「隠密」である。若しくは忍。

別に忍んでいる訳ではないのだけれど。

そんな私の人生を揺るがす一大事、17年しか生きてないけど、これ以上の不幸ってちょっと思いつかない。いや本当に。明日から一文無しで住む家ありませんって言われた方がまだ救いがある気がする。いや、そこまで不幸じゃないんだろうけど。ちょっとこれは受け入れられない。

その一大事とは、告白したことです。

はい、大したことないじゃんと思っただアタタ！告白自体が問題ではないのです。告白した相手が、ひいては相手のお返事が一大事なのです。あ、振られたとかじゃないです。振られたのは納得できません。

まず、私が告白をした理由ですが。まあ、ぶっちゃけ罰ゲームです。友達と放課後騒いでたら、とある一人が「デンジャラスなあみだくじしよう」と言い出しまして。とにかく自分なら絶対にしないだろう嫌なことを書いて、普通にあみだくじをして、皆が当たった嫌なことを実行するというものでした。そしてそれで私が当たった嫌な事とは、全校集会の直後（つまり全校生徒の前で）好屋君に告白するといつもものでした。はい、晒し者ですね。書いた奴を殴り飛

ばしたいです、私ですけど。

別に全校生徒の前で告白して振られるなんて大したことありません。精々3日程学校を休む程度です。

そうですね、振られなかつたんです。

顔は十人並み、成績も中の中、性格はまあよくある感じ。加えて隠密スキル。特徴と言えば隠密スキルくらいしかない私に対し、好屋君は成績優秀かつ眉目秀麗で密かに学校中の女子の憧れの的だったりするのです。

そんな彼に告白して振られるなんてよくある話、それでも好きって女の子がいるのもよくある話……ではないけれど。彼同じ中学の人が言うには、中学時代に付き合ってた女の子を監禁しようとしたとか何とか……。噂だけだね。そんなこんなで彼のファンなる存在はあれど、彼に告白をかます女子はいなかったのです。

回想中。

「スキデス、ツキアツテクダサイ」

緊張して超棒読みだったなあ。大根役者もいいところ、全校生徒の視線を一身に受けた私は目を泳がせながら真正面に立った好屋君に言いました。

「……………」

突然のことに驚いたのでしょう。好屋君は目を丸くして私の頭のとっぺんからつま先までを視線で往復します。3往復くらいした頃でしょうか。好屋君はそれこそ彼のファンである女子が見れば赤面しつつ歓声を上げそうならそれはもう美しい微笑みで言いました。

「いいよ」

回想終了。

思えばあの時が私の人生終了の時。彼のファン達の悲鳴が今も耳に残っています。ああ、怖い。

「学校行きたくない……………」

そうは思ってももうすぐテストだし、休む訳にはいかない。中でも下よりマシ。ああ、でも行きたくないなあ。好屋君に会いた

くない。

何か好屋君と同じ中学だった人全員に、可哀相なものを見る目で肩を叩かれたり、何かあったらすぐに誰かに相談しなよとか何かあったら言つてね、可能な限り力になるからとか優しい(?)言葉をかけられたけど。そんなにやばい人なんでしょうか。

「山田さん」

「うあつはいい!?!」

後から突然声をかけられて、思わず奇声を上げてしまった。

(隠密と呼ばれる私が背後をとられるなんて……不覚!)

振り返るとそこには乙女ゲーのスチルのような美しい微笑み……を湛えた好屋君。や、本当に美形です。かっこいいです、眩しいです。

「おはよう」

「お、おはようございます」

挙動不審になる私。目が泳いでる私。

「……昨日はごめんね、告白されることとかあんまりなくて舞い上がっちゃって」

申し訳なさそうな顔までイケメンってどういうことだろう。眉が八の字になっててこう、私がやったら間違いない情けない顔になるだろう表情でもイケメン。恐るべしいケメン。ていうかあれのどこが舞い上がってたんだ。理解できない。

「え!?! いや私こそあんな人の多いところで……」

あれ、案外普通だ。告白されることが少ないというのは嘘だと思っけど、噂のせいかな。てか私罰ゲームで告白したとか絶対言えないじゃん。この流れ。どうしよう。

「いいよ、嬉しかったし……ああ、それでね」

にこりと微笑む好屋君。

「ケータイ貸して?」

と言いつつ私の制服のポケットから盛大にはみ出したストラップを掴んでケータイを抜き取る好屋君。

「泣くほど悲しいの？ ケータイくらいなら弁償するよ？」

目尻から零れた涙を優しく拭う。イケメンです。間違はなくイケメンです。他人のケータイを故意に逆パカした直後でなければときめいたかもしれない。

てかケータイは高価だよ。

「あ、でもこれはダメ」

そう言って再び素晴らしい笑顔で、私が残骸から救出したばかりのSDカードを握りつぶしました。

何なのこの人、超怖い。

「あああああああー！」

大事なSDカードが……本体壊れても大丈夫なように電話帳をコピーしておいたSDカードが。これでは以前登録していた人にまた改めてアドレス交換してもらわなければならぬ。

「今日の放課後買いにいこう、ケータイ」

にこにこして言ってるけどあんたが壊したんだからな。私は多分人生で一番情けない泣き顔を晒している。

「あ、でも僕以外のアドレス登録してたりしたら壊すから」

そりやあもう美しい笑顔ですけど言ってることおかしいぞ。

「それから……」

カチャ……。

泣きながら睨み付けていた好屋君の顔から視線を下にずらすと、私の左手首にしっかりと手錠がはめられていました。

「な、何これ!？」

持ち上げてみたらちよつと重い。え？ 本物？ いやいや。ぶんぶん振り回してみたり、引っ張ったりしても取れない。

「指輪の代わり」

指輪って……指輪？ こう、手の指にはめるあれ？ の代わりが手錠って何だ。

「兼首輪の代わり」

首輪!？ 何で首輪だ。指輪よりわけわからん。

「はずしてよ！」

「どうして？」

「どうして、だと……。」

「だって何で私が手錠なんかしなきゃなんないの!？」

「だってもう僕のものでしょうか？ 僕が何しようとか僕の勝手だよ？」

「好屋君おかしい。絶対おかしい。だいたい……。」

「私がいつあんたのものになったの!？」

「昨日」

「きつぱり言い切る好屋君。え？ 昨日って私が全校生徒の前で大根役者つぷりを披露したあれ？ あれで私は好屋君の所有物になったのですか？ 告白してきたらそいつは所有物なの？ やつぱりこいつおかしいよ。」

「授業中はクラスが違うし、仕方ないけど……それ以外は僕の目の届く範囲にいてね」

「思わず通行人が振り返るような美しい笑みでも言ってることは犯罪っばいよ好屋君。」

「……………無理」

「何で私はあんなことしたんだ。全力で嫌がったら皆罰ゲームを変えてくれたかもしれない、ってか何であんな罰ゲーム書いたし。書いた自分をぶん殴りたい。」

「え？ 聞こえないな」

「途端に笑顔を引つ込めて冷めた目で私を見下ろす好屋君。怖い怖い怖い。何この人絶対ドメスティックバイオレンス。背中に冷や汗そして悪寒。」

「もう一回言ってくれろ？」

「私の手にはさっきぶち壊されたケータイ。もっかい嫌って言ったらどうなるんだろう。私もこのケータイみたいになる？ いや、逆パカはないだろうけど、恐ろしいことになりそう。というか私の想像が恐ろしい。」

「……………了解しました」

消え入りそうな声で私は言った。怖い。恐怖心に勝てなかった。

「そう、じゃあ今日は放課後にケータイ買いに行こうね」

途端に花が咲くように笑顔になって、手にはめられてない方の手錠の輪を掴んで歩き始めた。私も左手の手錠に引っ張られるように歩き出した。ちよつと痛い。手錠痛い。

「あ、ケータイは買ってあげるけど僕以外と連絡とつちやダメだよ？」

歩きながら楽しそうに言う好屋君。

昨日の彼と同じ中学出身の皆様の視線の理由と優しいお言葉の意味を理解しました。これに告白する勇者なんていないよ、普通。怖いし怖いし絶対ドメスティックバイオレンスだし……。でもとりあえず今は。

「家族は例外にしていただけませんか？」

私の地獄はまだ始まったばかりである。

11の

8

みや君は頭がおかしい

「まあ家族なら仕方ないね」

(良かった……)

「あ、でも一親等のみに限り、ね」

「ええ!？」

「何？」

「な、なんでもありません……」

万が一結婚出来ちゃう相手

はぜーんぶアウト。

(後書き)

基本的にいつもどおりの残念クオリティ。

勝手にケータイ壊すのは最低ですね。ダメ、絶対！

大概自分を普通だと思ってる登場人物って普通じゃないと思うんですが、まあ山田も普通じゃないです。普通の人は隠密とか呼ばれません。多分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9701x/>

このみや君は頭がおかしい

2011年10月27日17時01分発行